

「四谷怪談」の宅悦

大阪芸術大学 文芸学科 教授 出口逸平

鶴屋南北の『東海道四谷怪談』は民谷伊右衛門とお岩の物語として知られるが、別に直助とお袖の脇筋がある。そしてこの主脇2つの筋を繋ぐ人物が、按摩の宅悦である。彼は売春宿を営んで妹お袖を働かせ、伊右衛門宅では産後の姉お岩を介抱する。またほかの登場人物にモデルがあるのに対し、宅悦こそ作者南北が新たに生み出した人物なのである。

1825（文政八）年の初演から現在まで、数多くの役者が宅悦を演じてきたが、今回はふたりの人物にスポットを当ててみたい。1人は歌舞伎界の名脇役四代目尾上松助（1843～1928）、もう1人は戦後新劇の個性派俳優三島雅夫（1906～1973）である。

1 四代目尾上松助 一歌舞伎の宅悦一

尾上松助は1882（明治十五）年8月久松座上演の『形見草四谷怪談』を皮切りに、1918（大正七）年6月帝国劇場公演まで、生涯五度も宅悦を演じている。これほど宅悦を演じた役者は、ほかにはいない。文字通りの宅悦役者である。

彼は、宅悦という人物について次のように述べている。「ただ金を貰って頼まれてお岩様を口説き、姦通といふのを廉に伊右衛門がお岩様を放逐さうといふ狂言のタマにつかはれるのでございますから、別段非常な悪人と申すほどの者でもございません。然うかといつて、金ヅクでそんなことをたのまれて為やうといふ位の奴でございますから決して善人ではないので、いはば欲張った、凶々しい不正直な男なのでございませう」「頼まれてお岩様を口説くのは口説いたが、もともと尻ッ腰のない奴ですから、斬るといはれて驚き、いくぢなくたくみを白状して了ふという極チャチなのでございます」（『四谷怪談』の宅悦『演芸画報』1914年8月号）。

上の発言からわかる通り、宅悦の見せ場は第二幕「雑司ヶ谷四ッ谷町の間」のお岩の髪梳きのシーンにあり、松助は「始終気味の悪さに座にも堪へぬといふ心でをります（略）ただ受身に受身にいたしまして、少しでもお岩様の可怖さを増すやうにいたされれば、それが成功とでも申すのでございませう」（同上）と、演技の要点を控え目に語っている。

しかし彼は「ただ受身に受身に」、恐怖にうち震える小悪党を演じていた訳ではなかった。実は「子供を賺すやら、お岩の用を聞くやら忙しい中で、行燈の明を気にして油を注いで灯心を掻き立て、何か取つてくれとお岩にいわれてそれを渡す時に顔を見ぬ様にして、渡して置いてちやつと飛び退く程恐ろしがりながら、やはり怖いもの見たさにその間々でお岩の様子を見逃さぬ様にして居る」と、恐怖と好奇の入り混じった微妙な人間心理を巧みに演じて、「宅悦の性情を模し得たる」（『歌舞伎新報』1896年8月7日）と高く評価された。

新劇のパイオニア小山内薫も「松助は怖がついていながらその恐怖を陽気にはでに見せていました。南北のおかし味はあたりの暗い中にぼつとり明かりをつけるというやり方です。それで凄味がなほ出てくるのです」（『新演芸』1923年6月号）と、笑いと恐怖のないまぜにした「動」の演技で、陰気で嫉妬深い「静」のお岩との対比を際立たせ、それによって怪談の「凄味」を倍加させるという、松助の巧みな演技術を指摘している。

2 三島雅夫 一新劇の宅悦一

三島雅夫は劇団俳優座による1964（昭和三十九）年の『東海道四谷怪談』初演（小沢栄太郎演出）の宅悦役で、芸術祭奨励賞を受賞した。その評判を受けて、翌65年豊田四郎監督の映画、68年の俳優座による再演でも宅悦を演じている。

彼は宅悦を「たいへん生活力の旺盛な奴ですね。そのやりくりに一生涯埋没しているうちに、自然とこの役のあくの強さ、暗さが浮かんでくるような人物」（『歌舞伎』1969年7月号）と読み解く。宅悦の庶民的な生活力に注目する点はいかにもリアリズム志向の新劇俳優らしい解釈だが、続けて「ただしこうしたリアリティ溢れた人物だからといって、すぐ現代のモデルと結びつけてこと足れりとしては危険です」と安易な現代的演技を戒めている。それは「こうした生活感に溢れた人物や、その言葉を表現する場合には、ちょうど歌舞伎の方が洋服を着て動作し話すより以上のゴコチなさを自身に感じ」るからだ。これは、能・歌舞伎といった伝統演劇を「旧劇」と非難し、西洋演劇の系譜に連なる自らを「新劇」としてきた日本の近代演劇に対する疑問が、三島や小沢たちに共有されていたからである。

「一度断ち切った伝統への志向」（同上）から、三島は第二幕の髪梳きのシーンのみならず、現行の歌舞伎では省略されがちな第一幕「浅草宅悦住居の間」や第四幕「深川三角屋敷の間」も丁寧に演じてみせた。第一幕では幕末社会の底辺、したたかで狼狽な「地獄宿」の世界をユーモラスに演じ、第四幕では兄妹と知らず枕を共にする「悲劇」のきっかけを、滑稽な姿で表現した。怪談劇にとどまらない、江戸の下層社会を描く社会劇としての「四谷怪談」を、宅悦は象徴している。そのことを三島の宅悦は、観客に気付かせたといえるだろう。

歌舞伎には「道化にして悪党」という人物類型がある。「四谷怪談」の宅悦もまたその類型の一員である。四代目尾上松助はそれを怪談物の枠の中で表現し、三島雅夫は社会劇の中で演じてみせたとみることができる。